

# 学校における心理臨床についての一考察

—スクールカウンセラーの活動を通して—

初 塚 眞喜子

## 1. はじめに

いじめ、不登校など近年の学校現場における様々な問題について、文部省がその解決を図る一助として臨床心理士等をスクールカウンセラーとして起用する画期的な事業を開始して今年で4年目を迎える。

平成7年、154校にスクールカウンセラーが配置された。平成8年には初年度の約4倍の予算が計上され、平成10年には約33億円の国家予算の投入により1665校でスクールカウンセラーが活躍しており、初年度の約10に拡大した事業となっている。

現在、行政的には「スクールカウンセラー活用調査研究委託事業」として位置づけられているが、4年目を迎えて新しく制度化へと進む段階に来ている。平成10年度日本心理臨床学会第17回大会のシンポジウムにおいて、文部省初等中等教育局長より、あと2年間の調査研究期間を経て本格的な制度化、法令化を実現してゆく方針が示されている。

本稿では、筆者が平成8年度に担当した小学校におけるスクールカウンセラーの活動を振り返りながら、学校における心理臨床の現状と課題について検討し、スクールカウンセラー制度の今後について展望したい。

## 2. スクールカウンセラーからみた学校風景

### ・ 出会いの中で

スクールカウンセラーとして、相談室を中心に出会った児童は、優しいものを求め、暖かく触れ合い、強い好奇心と素直な行動力をもっており、筆者はB小学校に赴任したその日から驚きと感動を持って眺めていた。

元気に挨拶する児童達の笑顔、迷い込んできた子猫にみんなでミルクをあげる姿、運動場で見つけたカメに何を食べさせてあげたらいいだろうと職員室まで聞きに来る児童の

姿が日常的にみられた。カーペットと畳が敷き詰めてある相談室（資料1参照）にはいろいろな種類の遊具が置いてあるが、その中で1年生から6年生までの児童の間で人気の的となっているものがあつた。それは、数多くあるぬいぐるみの中でも、毛がフサフサとした「犬のタヌチャン」と滑り台の二つである。

児童は、相談室の入り口で上靴を脱いでカーペットや畳の上で飛び跳ねるのが好きなようだ。肌感触の良いぬいぐるみを抱きしめ、寝ころんだり、滑り台を楽しむ姿から、児童達が優しいもの、スキンシップを強く求め、身体を自由に動かす解放感を思う存分楽しもうとしていることがうかがえた。また「そうだんの先生」の顔を一目見たいと相談室に殺到してくる児童達。さらに、面接中の相談室で人と人がお話をしている様子を強い好奇心で覗きたがる児童達。その様子を覗こうとするが、窓に背が届かないので3人がかりで工夫・協力して肩車をし、何とかして中を見ようとしている児童達の縦に並んだ3つの顔を見て、筆者は思わず微笑んでしまった。自分がおもしろいと思うことは徹底的に探求して行く。「自分で決めて」「自分で選ぶ」という子ども自身の内発的な力によって身近な人や事物と関わり、その関わりの中で自分自身を作り上げて行く。これら児童の「目が輝く」姿から、学校生活の中で成功感、達成感を体験し、友達と楽しく触れ合う中で「自分を好きになる」ことの根源を感じることができた。赴任した初日、筆者は、まだ幼稚園児と変わらないまん丸の目を輝かせた1年生と、もう中学生ではないかと思われるくらいの雰囲気感を漂わせている6年生に出会い、この児童達をまとめて小学生と呼ぶことに違和感を感じた。しかし、相談室で出会う1年生から6年生までの児童達に共通して見られる「輝き」を実感してゆく中で、この児童達に人が生きる姿、発達してゆく姿の原型を読みとることができた。筆者は、ここに初等教育の大切さを再認識した。

しかし、児童の姿はこのすばらしい面だけにとどまらなかった。スクールカウンセラーとしての日々を重ねる中で、児童のもつ強いストレスとともに彼らのもつ様々な顔とその内面にある様々な気持ちを知ることができた。

次に、教師との出会いは職員室が中心の場となった。職員室そして学校全体に温かい優しい雰囲気だけがただよっているという印象を持った。2年間の研究事業のうちの2年目を引き継いだため、スクールカウンセラーの受け入れ体制が順調に進行している中での出会いであった。お互いに違う立場にいるという不安と、とまどいを抱きながらもスクールカウンセラーへの期待とカウンセリングマインド等を知りたいという強い思いや熱意が伝わってきた。

保護者との出会いも同様で、赴任した次の週から相談の予約がぎっしりつまっていた。

#### ・活動を展開するなかで

相談室の活用は、児童には午前中のロング休憩の時間（25分）を定期的に解放し、その

他の休憩時間や放課後のあき時間を不定期に解放した。相談室は児童にとってストレス解消の場であり、相談をさりげなく持ちかける場、お話を聞いてもらう場となった。多くの児童が遊んでいる中で、ボソボソとあるいはポツンともらした言葉の中に1対多数のクラスの中ではくみ取れない一人ひとりの本心や要望、あるいは不満をつかみとることができた。この雰囲気の中で、個人的な相談を希望する児童は予約を取って放課後に1対1の面接を行った（児童からの相談の申し込みはこの他にも相談室に直接予約を取りにくる、手紙で予約する等いくつか設定した）。学校の中に、教科を学ぶことを中心にした教室以外の教室、すなわち相談室があることの意味がここにあったと考えられる。

以上の相談活動を展開する中で観察された児童の、教室ではあまり見せない顔や姿をいくつか紹介しておく。

### ① 強いストレスと多面性

相談室では、1年生から6年生の男子児童、女子児童が入り混じって、互いをうまく受け入れながら様々な遊びを展開していた（1日に約50人の児童が相談室を訪れた）。その中で、教室では非常におとなしい児童が相談室では別人のように暴れ回ったり、一方教室で活発な児童が相談室で静かに一人遊びをしている姿がしばしば見られた。全体を通して見ると、普段の教室では考えられない程のパワーを相談室で示してストレスを発散してゆく傾向が日増しに強まっていったという感がある。そのような中で、ある日優しく抱きしめていたぬいぐるみを、別の日には乱暴に扱う対象へと変えてストレス解消のターゲットにしてしまう児童達の姿から、児童一人ひとりの中に内在するストレスの強さとところの揺れの大きさを知ることができた。

### ② 愛情に敏感なところ

クラス集団の中で自分がどのように見られ、扱われ、評価されているかについて、教師からの反応に非常に敏感で、名前の呼ばれ方の微妙な違いまで、他の児童と自分を比較してよく憶えている（例えば、あるプリントを渡すとき、Aには「Aくん」、Bには「Bさん」、Cには「Cちゃん」と先生は呼んだのに、私のことは「D」と呼び捨てにされたと訴えてきた児童がいた。その時の呼ばれ方にこだわっている様子であったため、担任の先生にそれとなく尋ねてみたところ、先生の方は全く記憶にないと言う返事であった。強いと言うならば、Dに対しては親しみをこめた軽い表現として「おい、D」といった呼び捨ての言い方をしたことはあるかも知れないということであった。これは先生側の好意的な表現が児童の心を微妙に傷つけたというよりも、教室という場で児童一人ひとりの心理に気づくことは、教師にとってかなり難しいことを示す一例であろう）。

その一方で、教師からの何気ないことばかけが、児童にとっては大きな喜びとなっていることが相談室での雑談のなかでしばしば話題となった。どの児童も教師に注目されたい、褒めてもらいたい、話を聞いてもらいたいと思っており、集団の中において教師との1対1の関わりを強く求めているのである。

### ③ わかりにくい深刻な悩み

大きな問題を抱えている児童は、担任の教師をはじめ学校全体でフォローされやすい。しかし、一見小さな問題で悩んでいる児童は、周囲の人達から気づかれにくい。筆者はこのような事例が予想以上に多いことを実感した。親や教師の側からみると小さな問題と考えられるような事柄でも、カウンセラーとして個人的に児童に面接してみると、その児童なりに真剣かつ深刻に悩んでいるのである。このことは、いじめの問題が学校で気づかれにくい状況と関連していると思われる。

次に、保護者とは午前中と午後に分けて、1回50分の面接を実施した。核家族化が進んでいる近年の状況においては、話を聞いてくれる人が身近にいないため、孤独かつ深刻に悩みを抱えている母親が多いことが再確認された。さらに、担任の教師へ意見を言ったり相談を持ちかけることをたいへん難しく考えている母親が多く（遠慮したり、話すことが子どもに直接跳ね返ってこないかと過剰に不安になっていたり等）、教師に伝えたいこと、言いたいことをかなりさし控えて戸惑っている傾向がみられた。

教師とはテーマを決めた全体職員研修会の他に、低・中・高学年別にグループ分けしたフリーテーマの懇談会を何度かもった。この機会にスクールカウンセラーと教師の立場や考え方の違いを互いに確認したり、守秘義務を大切にしつつ相談室での児童の様子、特に教室では見せない児童の姿を伝えることに務めた。筆者はこうした公式な会議よりも、職員室で随時、教師との間で自然発生的に取り交わした「立ち話」が予想以上に有意義であったという印象をもっている。

## 3. 学校側からみたスクールカウンセラー制度

以下は、平成8年度文部省スクールカウンセラー活用調査研究委託担当校による報告書の中で、学校側が執筆担当した「学校側からみた成果と課題」と資料であり、原文のままの引用である。

### ・成 果

#### ① 子どもにとって

休憩時間に相談室が開放され、多くの子ども達が足を運んだ。学習の場である教室とは大きく異なる部屋であること、評価とは関係なく受容し共感してくれるスクールカウンセラーが存在することで、子ども達は解放感を得て、日常教師には話しにくいことでも話すことができた。

子ども達にとっては、相談のきっかけの場であり、ストレス解消の場をもつことができたと考えられる。

## ② 保護者にとって（資料2参照）

個人的にスクールカウンセラーの面接を受けたり、講演会でスクールカウンセラーの話を聞いたりすることで、子どもへの関わり方を見直したり接し方を変えたりすることが安心してできるようになっている。そんな保護者の変化が子どもによい影響を及ぼしている。

## ③ 教師にとって

スクールカウンセラーの、受容し共感する姿勢を身近に感じるにより、子どもの見方が豊かになってきている。「子ども達の本当の気持ちがわかるような教師になりたい」「子どもが、ほっとして話をしたいなあ、という存在の教師になりたい」と、教師の思いがふくらんでいる。

### ・課題

#### ① スクールカウンセラーと教職員とのつながり（資料3参照）

週に一日というスクールカウンセラーの勤務時間では教職員との連絡を十分にとることができず、子どもの問題行動も現状を見てもらいにくい。そのため、相談をするタイミングがあいにくい。

#### ② 守秘義務

保護者との相談内容が担任には知らされないため、適切な指導ができているのか不安になることがある。また、開放された相談室で、スクールカウンセラーが問題を感じている子どもと、教室で担任が問題を感じている子どもが重なっているかもしれないし、違っているかもしれない。それぞれに情報を得られれば指導に生かすことができるかもしれないと考える教師の思いとスクールカウンセラーの守秘義務とのギャップを今後解消していかなければならない。

#### ③ 相談室

スクールカウンセラーがいないときや、教師にとっても、ゆとりを持つ場等としての活用方法を考えて行く必要がある。

以上、学校側からのコメントと資料の一部を紹介した。スクールカウンセラー制度導入の時期を担当した筆者は、スクールカウンセラーとしての責務をどの程度果たせたのか現時点ではまだ語りきれない。学校組織の一員となって、学校、教師の教育活動が円滑に機能するように個人心理療法的な視点を基礎とした援助活動を行ってゆく、その意義や具体的な活動を検討する場をB小学校の先生方と共有できたことを心から喜んでいる。本当に充実した、今ふり返ると楽しい1年であった。また本稿の資料は、スクールカウンセラー活動が本格化していない時点のものであったことも考慮を要する。現在4年目に入り、派遣校が拡大されている中、学校現場の意識もスクールカウンセラーの意識も少しずつ変化し、発展しつつある。

#### 4. 考 察

これまで教師は教科指導だけでなく、生徒指導や相談活動も担当することが当然のことと考えられてきた。しかし、近年の状況ではその限界が指摘され、スクールカウンセラー制度が試行的に導入されている現在、教師とカウンセラーの連携、協働が模索されている。

スクールカウンセラー活用調査研究委託事業が4年目に入った現在、スクールカウンセラー制度について様々な角度から実態調査や研究が進められている<sup>2), 5), 8), 10)</sup>。なかでも教科教育の専門家である教師と心理臨床の専門家であるカウンセラーが、児童生徒の健全な発達という共通の目標に向かって取り組んで行くとき、互いの役割や立場をいかに理解して実践して行けるかという課題に関心が集中している。教師とカウンセラーが互いに相手の立場に立つことの難しさも指摘されている<sup>1), 3)</sup>。

日本においては、まだ学校における児童生徒の相談活動は教師自身の手でという考え方が根強い。しかし、スクールカウンセラー制度の導入は、相談活動は、教師かカウンセラーかという二者択一ではなく、学校経験のあるカウンセラーへの期待も含めての議論へと展開されつつある。伊藤は、スクールカウンセラーが学校現場で果たしうる役割には、カウンセラー主体で行うべきもの、教師の援助的立場で関わるもの、両者が共同で行うべきもの等さまざまであると指摘し、教師とカウンセラーがこれらの役割をどのように認知し、どのような役割分担あるいは協業を考えているかを明らかにしてゆく必要性を強調している<sup>4)</sup>。教師とスクールカウンセラーの立場のちがいを反映したずれば、筆者も学校現場で日々実感した。

例えば、B児童の例（資料2，3参照）からもわかるようにスクールカウンセラーに対

する評価は、保護者の母親と担任教師では、ずれがみられる。スクールカウンセラーを全面的に受容している母親に比べて、成果を急ぐ担任教師は、教育相談を受けてもB児童は変わらなかったという評価をしている。ここで重要なことは、筆者とB児童の担任教師は特に人間関係が悪くはなかったということである。人間関係の良さ、悪さという次元の問題ではなく、父性原理をベースに成果を大切にす教師の立場と、成果とは離れた視点で母性原理をベースに受容する立場のカウンセラーの専門性による、ずれが起こるということに注目しなければならない。

学校現場において、教師とカウンセラーは専門性と立場の違いから、それぞれが不安と心の揺れを感じながら、児童生徒の問題解決を模索しているのが現状であろう。

スクールカウンセラー制度は発展過程にあり、まだまだ様々な問題、課題を内包しつつ進められているのが現状である。今後、実績を積み上げてゆく中で教師とカウンセラーの相互理解と協力、協働について、さらにもう一つ、学校というコミュニティの中での情報管理、すなわち守秘義務の問題を軸に、多面的な視野からの検討が重要であろう。

最後に、筆者がスクールカウンセラーを実践する中で考えたこと、気づいたことを紹介してまとめたい。

#### ① 様々な人と接する機会

日本では、これまで教科指導と生徒指導の両方を学校の教師が担当してきたが、米国では、教科指導と生徒指導は基本的に分業である。教師は教科指導の専門家であり、生徒指導はほとんどスクールカウンセラー等が中心となって担当している。スクールカウンセラー制度導入が、即米国と同様の教師とカウンセラーの分業体制へと向かうには、日本と米国では学校現場の土壌や意識に大きな違いがある。しかし、いじめ、不登校など多くの問題を抱える学校現場に対して、表1<sup>2)</sup>に示した学校教育に隣接する領域からのアプローチは、教師一人ひとりの教育観、価値観を充分発揮してゆくための援助活動となるはずである。

筆者は、スクールカウンセラー制度導入は、学校で様々な人と接する機会を児童生徒に保障してゆく第一歩であると考えている。伊藤他による研究調査で検討されているように、教師とスクールカウンセラーの関係だけでなく、学校現場の教師カウンセラー、学校現場の経験のあるスクールカウンセラーと経験のないスクールカウンセラー等、多面的な視野からの検討は大へん重要である。しかし、これからの展望として、学校は教師とスクールカウンセラー以外にもっといろいろな立場の人がいるコミュニティとなる方が望ましいのではないだろうか。現在、スクールカウンセラーというかつて学校に存在しなかった新しい立場の人が入ってきただけで様々な議論をかもし出しているが、児童生徒に対してもっ

と多様な接し方ができる人が学校現場に多くいた方が良いのではないだろうか。

例えば、筆者が担当していた小学校では、保護者の母親達がしばしば学校を訪れて委員会の活動やバザー等の世話役の仕事をしていた。そのような中で、児童達が「あっ、〇〇君のおばちゃん」と声をかけて働きかけている姿をよく見かけた。自分の母親ではないが、ちょっと見知っている「〇〇君のおばちゃん」が学校の中では妙に話しやすく、人なつっこく話しかけているのではないかという印象を受けた。一方母親の方は、委員会の活動やバザー等の取り組みには素晴らしいパワーを発揮していた。しかし、教師の専門領域を犯すべきではないという配慮のためか、教師に全面的に任せているという意識のせい、母親の方から積極的に教室へ出かけたり、児童達への働きかけは控えめであった。大人達の思惑など全く気にかけることなく、児童達は屈託なく、そして積極的に学校の中で出会う人達に接している様子と対照的であった。母親のもつ素朴で真摯な活動ぶりを観察することができた筆者は、専門家ではなくてもこの母親達の素晴らしい力を生かせる場所が学校の中にあるのではないかという思いに至った。

それは言い換えると、教師や親に話しにくいことを話せる相手は、スクールカウンセラーだけではないだろうということである。児童生徒は、いろいろな人に支えられて成長発達してゆくのである。この役割は必ずしも保護者だけではなく、地域の高齢者や地域で働く人など様々な人達に期待できるはずである。

## ② 地域社会が学校の中に開かれてゆく

教科指導を中軸とした教育活動の担い手である教師と心の悩みについての相談活動を担うカウンセラー、この2本柱をそれぞれ専門家として学校コミュニティのなかに位置づけ、定着させてゆくことはこれからの重要課題である。これに加えてもう一つ、筆者は、3つ目の柱として、専門家ではないが豊かな人間関係の広がりを作ってゆける様々な人達の居場所が学校コミュニティの中にあっても良いのではないかと考えている。

教育や福祉の領域では、盛んに地域の活性化、連携が議論されている現代社会である。地域に開かれた学校ということばをよく耳にするが、筆者は、地域社会が学校の中に開かれてゆくという発想がいま、必要ではないかという提案をしたい。スクールカウンセラーとして学校の内側から地域社会を見る機会を得ての実感である。

## ③ 人間関係の多層性 — 血縁から地縁へ —

かつて、子ども達は大家族の中で、父親、母親、兄弟姉妹、祖父母、いとこ、叔父、叔母等、様々な人に支えられて成長発達してきた。そこでは日常生活自体が学びの場であった。核家族化が定着しつつある現代社会では、かつての大家族に見られた多様な人間関係



は、地域社会の中にその可能性があると言えよう。また、生涯発達、生涯教育の観点からも地域社会に内包している人間関係を構築して、学校コミュニティの中に逆輸入していくべきではないだろうか。そして、学校を日常生活に近づけてゆくことが子ども達のこころの教育へと導いてゆく手だてとなるのではないだろうか。子どもの成長発達には、人間関係の多層性が必要である。

教師、児童で構成される学校コミュニティにスクールカウンセラー制度の導入は、学校の多層性確立への一歩となるであろう大きな展開を示唆している。

### 引用・参考文献

1. 江口昇勇 1998 スクールカウンセラーの「未来」を模索する ―現場教師たちといかに渡り合うか― 心理臨床, 11, 183-187. 星和書店
2. 学校臨床心理士ワーキンググループ（代表 村山正治）1997 学校臨床心理士の活動と展開 日本心理臨床学会
3. 東山紘久・藪添隆一 1992 システマティックアプローチによる学校カウンセリングの実際 創元社
4. 伊藤美奈子 1998 学校現場へのスクールカウンセラー導入についての意識調査 ―中学校教師とカウンセラーを対象に― 教育心理学研究, 46, 121-130.
5. 倉光修（編）1998 臨床心理士のスクールカウンセリング② ―その活動とネットワーク― 誠信書房
6. 村山正治・山本和郎（編）1995 スクールカウンセラー ―その理論と展望― ミネルヴァ書房
7. 大塚義孝 1996 こころの科学増刊 スクールカウンセラーの実際 日本評論社
8. 横山典子他 1998 スクールカウンセラー ―学校からの報告― 発達, 75 ミネルヴァ書房
9. 鶴養美昭・鶴養啓子 1997 学校と臨床心理士 ―心育ての教育をささえる― ミネルヴァ書房
10. 大塚義孝・滝口俊子（編） 1998 臨床心理士のスクールカウンセリング① ―その沿革とコーディネーター― 誠信書房

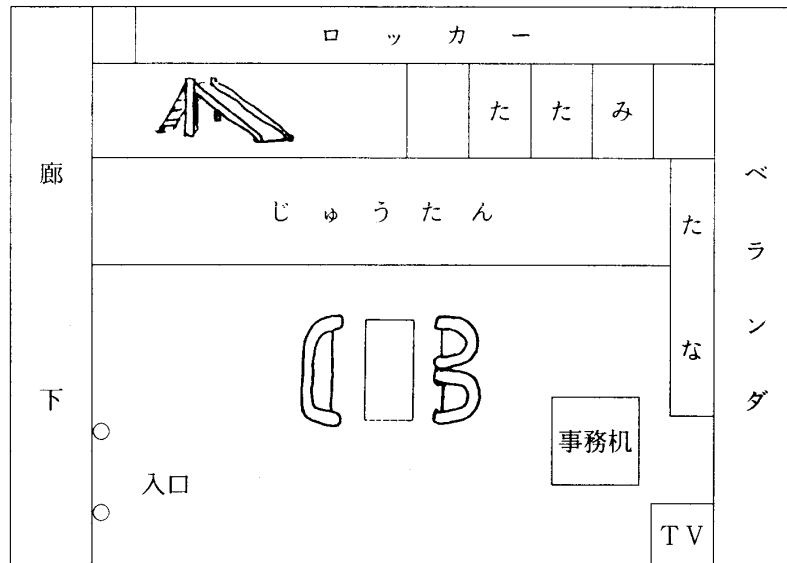
〈注〉資料1, 2, 3は、平成8年度文部省スクールカウンセラー活用調査研究委託事業の報告書より、担当校の教員、保護者が執筆担当した箇所を原文のまま引用したものである。

表 1 学校教育と他の隣接領域との比較

	学 校 教 育	心 理 療 法	精 神 科 医 療
担 当 者	教師、集団としての教師	心理臨床家	医師、医療チーム
対 象 者	子ども個人、集団としての子ども	悩みをもっている個人	自分を患者だと思っている個人
接 触 頻 度	毎日	50分/1週1回	3～15分/1～3週1回
接 触 形 態	1対多、集団対集団	1対1	1対1、多(チーム)対1
接 触 場 面	生活する中での観察・指導、さまざまな場面 教室内・外/保健室/クラブ/休み時間/給食/登下校時/行事/遠足/運動会/係活動/提出物/学力テストや作品	面接室・遊戯室  (実験的な非日常場面)	診療室
対 処 方 法	生活指導。一般的には集団指導。必要に応じて個別指導。 現実的・具体的な事実をもとに積極的に指導し、援助する。現実的な課題を設定し、段階的な課題解決に向かって努力する。現実復帰の促進のしやすさ。	原則は個対個で傾聴する。  内面に添いながら、本人が自分を見つめ、確かめ、受け入れ、成長していくプロセスを援助する。 現実復帰への具体的援助のやりにくさ。	診断・投薬・精神療法・入院治療  症状の軽減と発達上の問題のある時点からの育て直し。
保 護 者 へ の 対 応	学年1～3回の保護者面談。PTA。	定期的な親子並行面接・家族療法など。	患者への対応が原則
時 間 的 枠 組 み	学年・学期の区切り	時間的制約にとらわれず、本人の成長待ちの姿勢。	

【資料 1】

「教育相談室」整備状況



ぬいぐるみ

三輪車

手押し車

積木

ボーリングゲーム

輪投げ

ロボット

ショベルカー

ミニカー

ミニキッチン

ままごとセット

パズル

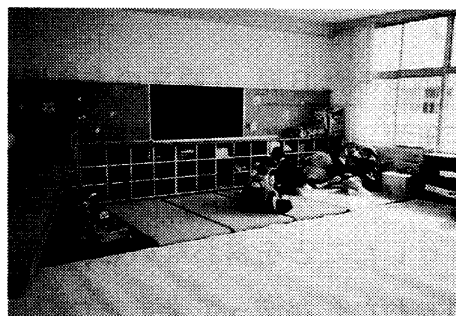
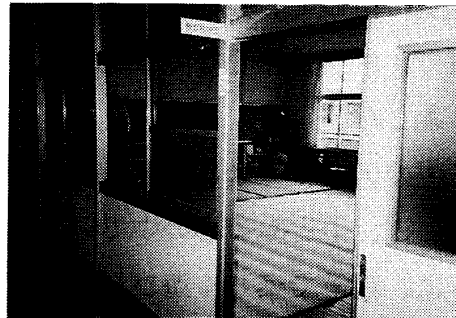
絵本

文庫本

将棋盤と駒

発泡スチロールのチップ

(段ボール箱に入れて)



**【資料 2】**・母親からみたB児（原文のまま掲載）

私が教育相談室を初めてたずねたのは、夏休みを終えた2学期の始めのことでした。男ばかりの3人兄弟の末っ子ということで悩み、相談に訪れました。

末っ子は、小さい時から今まで親を困らせることなく、本当に育てやすい子どもでした。平成8年4月9日の入学式を終えてからというもの本当に行動的で、お友達と遅くまで遊ぶという毎日でした。

それが、5月の出来事をさかいとして、外には遊びに行けなくなり、学校への行き帰りをいやがるようになりました。時には、「がんばって行こうよ」と言うと、足をふるわせて岩のように動けなくなったこともありました。

幸いに6年生のお兄ちゃんの協力もあり、できる限りお兄ちゃんと行動を共にすることで、学校を休むということは、2、3回だけですんだのですが、知人や病院の精神科の先生にも相談をしておりましたが、良い方向には向かいませんでした。

そんな時に、教頭先生からのお話もあり教育相談を受けることになりました。

初塚先生に初めてお会いして感じたことは、何と細やかに、またやさしくお話を聞いて下さる方で、本当に感心してしまいました。不安な気持ちも、この瞬間からすごく安らいだ気がしました。

初塚先生のアドバイスはとても分かりやすく、一つは「がんばろう」を絶対に言わないということと、子どもの心の中でいやな経験をした場所を本当は楽しい場所なんだと思わせるように、親子で楽しく遊びながら何度も歩いてみましょうと言われました。

この2点を私なりに出来る範囲で心掛けたところ、お兄ちゃんと楽しく通学できるようになり、それからは一人で帰ることも、お友達と約束をして一緒に帰ることも出来るようになりました。

親として、本当に一人の子どもの変化を目のあたりに見られて、とてもうれしく思いました。

**【資料 3】**・担任からみたB児（原文のまま掲載）

B（1年男）児のことで1学期も半ば頃、B君のお母さんが始業時刻に深刻な様子で学校に来られた。話の内容は、「最近、朝登校をいやがるようになって来た。理由を聞いてもはっきりしたことを言わないし、ただ行くのをいやと言うだけなのです。今朝特にひどかったのでわたしが送って来ました。」と涙ながらのお話であった。

B君は、入学当初から「きちんとしなければいけない」という気持ちがいろいろな場面

から見受けられる子であった。例えば、起立礼の合図の時、背筋をピンと伸ばしてあいさつをしたり、ひらがなの練習のとき、少しでもはみ出すと消しては書き直したり、とにかく1年生になったのだから頑張らなければという意識がより以上に強かったように思う。そして、先生にしかられるようなことは絶対にしてはいけないんだということを常に意識していたようだ。

ところが、5月下旬、B君を含む3人で下校する途中、小石を投げる遊びをしており、通りかかった車に当たってしまった。当たった本人がとんで帰り、残ったB君と友達、その車の人に注意されるという事件があった。次の日、校長室で注意を受けた。このことがB君には、かなりのショックだったらしく、（学校をいやがるようになって、随分後から母親にポツリと言ったことである）。登下校に不安を抱くようになった。家庭ではB君がどうすれば、気持ちよく登下校してくれるのかいろいろ話をしてくれたようで、「お兄ちゃんと帰りたい」と訴えるようになり、お母さんからの連絡で帰りは6年の兄を待って下校することした。（中略）

兄と登下校を1カ月ぐらいつづけてもやっぱり学校へ行くのを渋るので、教育相談を受けていただくよう勧めた。教育相談を受けるようになって朝の登校の様子は相変わらずであったし、兄を放課後遅くまで待ち下校する毎日が続いたが、お母さんは不安ではあるが、ゆっくり焦らず見守って行こうと気持ちを切り替え、B君の負担になるような言動はしないよう心掛けてくれた。教師の私も下校が遅くなっても「宿題しながら待っていいよ」「そろそろお兄ちゃん達終わるよ」など軽く声をかけるぐらいの程度にし、学習時においても「ちょっとぐらい字の形がくずれてもいいよ」とそっと声をかけるようにし、少しでもリラックスした学校生活がおくれるように気を配ってきた。2学期になって一番のネックになっていたのは、6年の兄が修学旅行に行くことであった。登校しにくい兄とならしかたなく登校できるし下校もできるが、兄がいない日はどうなるのか心配していた。やはり、二日間お母さんに送ってもらっていたようだ。でも、下校は一人でできたと聞いてB君にとって一歩前進できた。

修学旅行に続き兄の陸上記録会があった。この日は近所に住んでいるA組の子と帰る約束をしていたのだが、この日も一人で帰れた。こんなことがあってからB君は、一人で下校したり兄を待たずにA組の友達と下校したりできるようになってきた。この頃から学校生活の様子でも必要以上の硬さもとれて、無理をしないB君の姿を伺うことができるようになった。2学期後半には、「登下校をいやがる様子もなく、元気に学校へ行ってます」とお母さんの喜びの声を聞かせてもらえることができ、何よりもうれしい。しかし、何かと周りを気にするB君なので今後も見守ってゆきたいと考えている。